様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２８０８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７８０４８７

研究課題名（和文）障害児保育における保育者の熟達化過程に基づく園内支援体制のあり方に関する研究

研究課題名（英文）A structural affiliations based on expertise of nursery teachers engaged in care of children with special needs

研究代表者
廣澤　満之（Hirosawa, Mitsuyuki）

白梅学園大学・子ども学部・准教授（移行）

研究者番号：３０４６１７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、障害児保育に携わる保育者の熟達化を明らかにした。また、その熟達化に合わせて保育者をサポートする園内体制のあり方を検討した。これまでの障害児保育に関する熟達化研究の課題を明らかにした後、質問紙調査と面接調査を行った。その結果、担当した子どもの障害特性によって保育者の熟達化が変化する可能性が示唆された。また、保育者の熟達化に影響をもたらすのは、経験年数だけではなく、周囲の環境的なサポートや情緒的サポートに加えて、子どもとの関係性が要因となっていた。そして、園内体制に求められるのは、先輩保育者の適切なサポートと保育者が第三者の視点を取り入れられる機会を増やすことであった。

研究成果の概要（英文）：This studies analyzes expertise of nursery teachers engaged in care of children with special needs. And, the purpose of this studies is to examine structural affiliations system for nursery teachers. After exploring previous studies, we worked on questioner survey and interview. It suggested that the process of expertise were effected by characteristics of disorder. Moreover, that process has a close relation to changing interrelationships among children and nursery teachers with the exception of years of teaching experiences. It is important for novice teachers to understand children with special needs included several perspectives supported by expert teachers.

研究分野：発達障害学

キーワード：障害児保育　熟達化　園内支援体制

１．研究開始当初の背景

(1)障害児保育における保育者の熟達化過程
障害児保育に携わる保育者の熟達化に関する研究は少なく、いずれも保育経験年数に伴った保育者の保育観の変容として捉えられている。保育者が障害児保育を通して知識をどのように体系化したのかという点は検討されていない。担当した子どもの障害特性との関連も含めて熟達化過程を検討する必要がある。
(2)障害児保育におけるコンサルテーションと園内支援体制構築に関する研究
保育コンサルテーションは、障害児保育の領域で近年注目を集めている。特に５年目以内の保育者は保育の様々な領域で困難感をもつことを考えると、障害児保育を通した困難感に対して、保育者の熟達化に伴って、園内でどのような支援を必要としているのかについて明らかにする。

２．研究の目的

(1)文献研究
障害児保育に関する熟達化研究の到達点と課題を明らかにする。
(2)調査研究(質問紙調査)
障害児保育に携わる保育者が何を課題と感じているのかについて明確にする。特に困難感との関連を明らかにすることで、園内で必要とされるサポートを明らかにする。
(3)調査研究(面接調査)
障害児保育に携わる保育者の熟達化過程とその内容について明らかにする。

３．研究の方法

(1)文献研究
障害児保育に関する国内の文献のレビューを行う。
(2)調査研究(質問紙調査)
①対象者　保育者(保育所・幼稚園・認定こども園)434 名を対象とした(回収率 79.5%)。
②質問項目　年齢、所属等の基礎情報、保育困難感（17 項目)、熟達へのニーズ（23 項目)
③分析方法　保育困難感については，因子分析を行い，因子得点を求めた。所属，保育経験年数，発達に課題がある子どもの保育歴・担任歴と保育困難感との関連(分散分析)，熟達へのニーズとの関連(χ2 検定)を統計的に分析した。
(3)調査研究(面接調査)
①参加者　保育所・幼稚園に所属する入職５年以内の保育者６名であった。
②調査方法と質問項目　研究の概要やプライバシーの保護等について説明を行ったのち、面接を行った。質問内容は、参加者の基礎情報の他、以下の５点について自身が課題であると考えていることを質問した。それらは、保育技術、保護者への支援、他機関との連携、園内体制、発達支援で必要とされる知識である。
③分析方法　修正版-ｸﾞﾗｳﾝﾃﾞｯﾄﾞ・ｾｵﾘｰ・ｱﾌﾟﾛｰﾁ(M-GTA)を用いた。分析テーマは『保育者がもつ発達支援が必要な子どもに対する課題意識は、保育者としての自己の成長とどのように関連しているか』とした。

４．研究成果

(1)文献研究
先行研究を概観すると、障害児保育における保育者の熟達化に関する研究の課題は以下の三点にまとめることができると考えられた。
第一に、保育者の熟達化と子どもの障害の特性との関連を検討する課題である。障害児保育に携わる保育者の熟達化を検討した研究の多くは、熟達化に伴って保育者が障害児をどのように理解するのかについて焦点を当てている一方で、熟達化と障害特性との関連は未検討であった。障害の診断名の有無が保育者の支援方法に影響をもたらすということを明らかにした研究があることからも熟達化と障害特性との関連を検討する必要があるであろう。
第二に、経験年数以外の要因を質的に検討する課題である。熟達化を扱った先行研究の多くは、保育経験年数や障害児保育の経験を要因としてあげていた。この点に関しては、そもそも熟達化がある一定の道筋をたどるのかという問題である。先行研究の多くが熟達化を一方向への質的変化として捉えている。適応的熟達者は、個々のケースへの臨機応変な対応によって熟達化していくのであれば、保育者間に差異があることは明らかであり、その差異をモデル化する必要があると考えられた。
第三に、障害児保育に関する熟達化モデルをコンサルテーションといった実際の支援に応用する課題である。これまでの研究は、熟達化とは何かというモデルの構築に焦点が絞られていた。そのため、熟達化のモデルがどのように現場で応用されるのかという点にまで拡がっていなかったと考えられる。障害児保育に携わる保育者の熟達化モデルを基盤とした具体的な支援の方略を検討していくことが今後の課題とされた。

(2)調査研究(質問紙調査)
①保育困難感
保育困難感について因子分析を行った結果(最尤法・プロマックス回転)，4 因子構造であることが明らかとなった。
第１因子(５項目)：保護者との協働(α=.892)
第２因子(５項目)：園内外の連携(α=.857)
第３因子(３項目)：計画立案力(α=.820)
第４因子(３項目)：直接的支援力(α=.766)
障害児保育に携わる保育者の困難感は、上

記の 4 因子に集約されることが明らかとなった。この結果を基に、「所属との関連」「経験年数との関連」「発達に課題がある子どもの保育経験年数との関連」「発達に課題がある子どもの担任経験との関連」の各変数との関連を分散分析によって検討した結果、以下の②～④の知見が得られた。

②所属による違い

発達に課題がある子どもの保育経験年数が 1～4 年目の保育者にとって保育所の方がより「園内外の連携」が課題となっていた。これは，勤務形態の違いにより同僚や園長・主任等と相談する機会が少なくなること，発達に課題がある子どもは比較的保育所に多いことが関連していると考えられ，熟達のニーズも幅広いことが明らかとなった。

③保育経験年数との関連

保育者が発達に課題がある子どもの保育に感じる困難感は，保育経験年数と発達に課題がある子どもの保育経験年数を基準にすると差異が見られた。このことから，初任の保育者は全ての困難感を持つものの，保育の経験が比較的長くても発達に課題がある子どもとの保育が初めてであれば，園内外との情報の共有等に課題を持ち，熟達のニーズも異なっていることが示唆された。

④障害特性との関連

ADHD 児の担任経験が保護者との協働，園内外の連携の困難感を高めていた。これは，子どものネガティブな行動を保護者に説明しつつ解決を模索していくことや園全体で協働して保育を行う体制を構築していくことに困難を感じているためと考えられた。

(3)調査研究(面接調査)

①分析プロセス

分析の結果、34 の概念が見いだされ、4 つのカテゴリー(【保育への迷い】【環境的サポート】【情緒的サポート】【変化する保育観】)を含む結果図としてまとめられた。

②ストーリーライン

発達支援が必要な子どもに関わる入職 5 年目までの保育者は、子どもの発達課題の見えにくさや保護者に伝えるべき内容等といった【保育への迷い】をもちつつ曖昧な知識の中で実践していた。【保育への迷い】に対して、カンファレンスや外部研修での経験、他機関との継続的な話し合い、普段の何気ない雑談といった【環境的サポート】により視点が与えられる。また、【環境的サポート】には、当該保育者が園長や主任に見守られたという経験や先輩保育者との相談できる関係といった【情緒的サポート】が影響を与え、不安を軽減していた。これらのサポートとの相互作用の中で自らの保育観の省察が始まる。この省察に対しては、発達支援に関する知識、養成校での学び、担任になること、一人の子どもとの関わりを見つめる経験といった個別具体的な要因が関係していた。省察の結果として、長期的な視点で子どもを捉えること、障害特性に合わせた保護者対応への意識、関わりの個別化、子ども視点の重視といった従来の枠組みから【変化する保育観】が生じていた。

③本研究で明らかとなったこと

＜熟達化過程に影響を与える要因＞

保育者の熟達化過程については、経験年数との関連が指摘されているが、【変化する保育観】の背景に【環境的サポート】【情緒的サポート】といった経験年数に依らない要因があることが特筆すべきことであった。また、長期的な視点で子どもを捉えることや子どもの個別性への視点といった特別支援に通じる子ども理解は、【環境的サポート】【情緒的サポート】と【保育への迷い】の相互作用の結果として生じており、これらのカテゴリーを保育者が現場でどのように経験できるかという現職教育の課題につながると考えられた。

＜【環境的サポート】の重要性＞

保育者は、【保育への迷い】を持ちながら日々の保育を行っているが、その中で「療育機関との接触体験」(概念 22)「外部研修」(概念 28)「ケース会議（保育カンファレンス)」（概念 31）といったフォーマルな場における経験を通して、迷いに一定の方向性が与えられていた。また、本研究で特筆すべきであるのは、「雑談」（概念 19・概念 21）の機会が保育への迷いに方向性をもたらしていたことである。このことが示すことは、外部研修やケース会議といったフォーマルな場を整備することに加えて、インフォーマルな場（雑談）とその機会を整えていくことが熟達化に影響を与える可能性があり、保育者の迷いや負担感を軽減させる可能性があることであった。

＜【情緒的サポート】の重要性＞

【情緒的サポート】の中でも先輩保育者との相互体験が【保育への迷い】に影響をもたらしていた。先輩の言葉によって子どもへの関わりの方向性が見える(概念 8・概念 9)だけではなく、先輩の見守る姿勢が、保育への迷いを持っている保育者の支えとなっていた(概念 29)。

＜熟達化をもたらす直接経験＞

【保育への迷い】は、子ども理解の難しさと保護者との会話内容を選ぶことの難しさで構成されていたが、根底にクラス集団として捉える意識の強さがあると考えられた。具体的には、クラス集団を動かすことを保育の根底としているため、個別支援にまで行うことができないことが示された。しかしながら、対概念として、障害をもつ子どもとの関わりと成長を捉えようとする意識(概念 11)・障害をもつ子どもとの関係の変化の経験(概念 16)が位置づけられており、個別的な配慮を必要とする子どもの発達的変容、または保育者との関係発達の変容が保育観を変容させていると言えるであろう。したがって、障害児保育を担当する保育者は、クラス集団とし

て捉える視点から始まり、個別具体的な体験を通して保育観を変化させていくという熟達化過程をたどっていると考えられた。また、ここで言うところの「個別具体的な体験」こそが熟達化過程を単純に経験年数で説明できない(小川,2000)理由ではないかと考えられた。

(4)本研究課題のまとめと今後の課題

本課題では、(1)～(3)の研究を行った。これらをまとめると、以下の三点に知見を集約することができた。

第一に、障害児保育に携わる保育者の熟達化について、障害特性との関連が未検討であった点である。予備調査によって自閉症スペクトラム障害の中でも特に受動群の子どもについては、対応の手立てを考えにくいということが明らかとなった。また、調査１の結果からは、AD/HD 児の担任経験者は、「保護者との協働」「園内外の連携」について困難感を持っていることが明らかとなった。本課題では、熟達化の過程としては位置づけられなかったものの、特定の障害特性と困難感が関連していることが示されたことから、それらの困難感に関連する領域の熟達化に変化をもたらす可能性があるであろう。この点については、調査２の内容と関連づけてさらに詳細に検討していく必要がある。

第二に、熟達化の変容過程をもたらす要因として、経験年数以外の要因を質的に検討することであった。調査２の結果から明らかであるように、必ずしも経験年数のみが子ども理解の変容をもたらしているのではなかった。子どもや保護者への関わりへの迷いである【保育への迷い】は不安をもたらすものの、【環境的サポート】や【情緒的サポート】といった支えを基にして、「第三者の視点の取り入れ」、「一人の子どもとの関係の変容」等、複数の個別具体的な経験を通して【変化する保育観】がもたらされていた。これらの変化は、複数の先行研究が明らかにしたように経験年数による変化が主たる要因であるかもしれない。しかしながら、経験年数という時間の中でどのような経験が熟達化をもたらしたのかという、より具体的な内容を明らかにしたという意味で本研究は価値があるであろう。

第三に、障害児保育に携わる保育者の熟達化モデルを提唱したことによって、実際に園内でどのような支援体制が求められるのかということを明らかにすることであった。特に、離職が多い入職５年目以内の保育者が継続していくためには、障害児保育をすることで直面する困難感に対して園内でどのように解決していくかということが重要であると考えられた。調査１では困難感との関連を検討したが、その解消の方略については本課題では検討できなかった。一方、調査２では、【環境的サポート】と【情緒的サポート】という二点が【保育への迷い】を支えるという結果図が示されており、前者の二つのサポートが園内支援体制として求められるであろう。具体的には、【環境的サポート】について、「他機関との連携」や「研修」「ケース会議」といった第三者の視点を取り入れることの効果が挙げられていた。特筆すべきは、「雑談」の存在である。「雑談」を通して見通しを持てると答えていた保育者が多いことから、園内において「雑談」をできる環境（時間的余裕、雑談をできる空間、雑談が許される雰囲気）を整えることがひいては障害をもつ子どもたちの保育の質につながっていると言えるであろう。また、【情緒的サポート】としては、先輩保育者の存在が重要であり、単純にアドバイスを受けるだけではなく、「見守られた」という至極情緒的な感覚を持てることが同僚性へとつながり、【保育への迷い】の支えとなっていた。保育現場にメンター制度といったシステマティックなものはなじまないかもしれないが、実質的にはメンターとなる存在が居ることを考えると５年目以上の保育者といった熟達化の次の段階へと進んだ保育者が【情緒的サポート】の意味を理解する必要があるであろう。これらのサポートを整えるのは、それぞれの保育現場の管理者の役割と言える。管理者には、【環境的サポート】【情緒的サポート】の両面から職場環境を整える必要があり、それらが障害児保育を通した障害児の成長、また、保護者の安心感へとつながっていくと考えられた。ただし、本研究では、5 年目以内の比較的困難感が高い年代に着目して検討しており、5 年目以上の熟達化過程については明らかにできなかった。この点を明らかにすることが今後求められるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①廣澤満之（2014）障害児保育における保育者の熟達化に関する研究の動向．目白大学総合科学研究，10，1-8．

〔学会発表〕（計２件）

①廣澤満之（2016）　障害児保育を担当する保育者の熟達化－入職５年目までの保育者の熟達化過程－．日本保育学会第 69 回大会発表論文集，1098．

②廣澤満之（印刷中）障害児保育における保育者の熟達化　－保育困難感の分析を通して－．日本教育心理学会第 59 回大会発表論文集．

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
廣澤　満之（Hirosawa Mitsuyuki）
白梅学園大学・子ども学部・准教授
研究者番号：30461726